

E. パノフスキーの「(象徴形式)としての遠近法」がようやく日本語で読めるようになった(木田元監訳、哲学書房、1994)。ワールブルグ文庫でルネサンスの図像に接し、カッシーラー「象徴形式としての哲学」からの影響もあって結実したこの論文(1924-5)は、いわゆる遠近法が視覚器官の構造に照らしても、すでに視覚における真実とは乖離した知的作用による人工的構築物であったと主張する。球状の網膜への投射と絵画平面への投射とでは、像にあきらかに歪みが生じる、というわけだ。この主張は遠近法の「科学性」を掘り崩すうえでおおきな影響力を發揮し、「芸術と幻影」のゴンブリッチや「絵画と社会」のフランカステルが追認し、日本でもさる高名な批評家が敢えて鷓呑みにしてみせた。だがこれは早くもアンリ・ピレンヌが、そしてユベール・ダミッシュが再三反論したとおり、推論上の単純な勘違いだ。平面上に投射されれば歪んだ映像を結ぶ光線の軌跡も、そのまま網膜に投射すれば、問題の歪みは消えてしまうからだ。

それでも平面に投射した像を「真実」と見なす価値



遠鏡⑤
透視画法の遠近
東西文化交渉史のなかの象徴的形式研究のために

判断そのものは、あきらかに文化的な選択に裏打ちされた、ひとつの(象徴形式)であろう。となれば、ひたすら「遠近法の起源」に執着するだけでなく、「遠近法の精神史」(平凡社)、さらにはその間文化的な衝撃力に注目したい。磯崎康彦「ライレッセの大絵画本と近世日本洋風画家」、岡泰正「メガネ絵新考」、岸文和「江戸の遠近法」といった実証的研究から、金田吾「絵画の構造」、佐藤康邦「絵画空間の哲学」へと、日本語でも考察の手引きには事欠かない。そもそも「透かして見る」perspectiveはなぜ日本に「浮絵」として紹介されるや、佐竹昭山「画報綱領」や司馬江湾によって「遠近の別」を強調する技法へと誤解ないし改竄され、秋田蘭画から亟欧堂田善、はては広重の「名所江戸百景」(ヘンリー・スミス)が白芳年のあの異様な映像へと、一気に逸脱していったしまったのか。この過剰反応と、中国や韓国での無関心との差は? 「空間の経験」についての「眼の社会学」(ブルデュエ)、キプソンの『生態学的視覚論』をも視野に入れた、国際共同研究が是非とも必要な領域だ。

②

三重大学・フランス文学
稲賀敏美